

【 介入の効果評価 】

(1) HIV/STI 関連知識の変化

◆中学校3年生 (表7) (表8) (表9) (表10)

本予防プログラムに参加した中学3年生におけるエイズ/性感染症に関する知識項目の正解率を介入の前後で比較した。

知識項目のうち、若者のリスク認知に特に関わりの深い、「①クラミジアは性感染症、②HIVとSTIの相互作用、③STIは無症状のことがある、④STIは不妊の原因になりうる、⑤地元の中絶が多い」の5項目を重点知識項目として抽出し、介入前後の重点知識項目の変化を比較した。それによると、非介入群Iにおける正解率平均値の上昇は、男女とも約10% (男子10.1%、女子10.8%)にとどまったが(表7)、IVフルモデル群(男子50.4%、女子56.4%)では50%を越え(表10)、III中間介入群(男子44.2%、女子51.4%)(表9)もフルモデル群より若干低いがほぼ同じ効果が得られたが、II不完全介入群(男子29.2%、女子29.7%)では30%未満であり(表8)、モデル授業実施学校群では正解率が40-50%と、知識が大幅に増加することが再確認された。但し、重点知識項目の中ですべての項目が、同じように上昇しているのではなく、「STIは無症状の場合がある」の正解率の上昇は他の項目に比べて教育効果が小さかった。毎年、同様の傾向が観察されたため、今年度もこれらの項目に関してはビデオを見せるだけでなく教師からの図や言葉による強調した説明も加えて指導を強化した結果、他項目より知識の大幅上昇は見られなかったが、昨年度よりも10%近い上昇が観察されたため、この項目は重要な知識であるため、知識のエスケープが生じないよう、さらに、原因を究明し、追加のアプローチの必要性が示唆された。

男女で、I群(非介入群:2004年度)の値を、II群、III群、IV群(介入群)の値の分布と1標本t検定で比較すると、重点5項目すべてにおいて統計的に有意であった(男女とも:P<0.001)。

表7 HIV/STI 関連知識(重点5項目)の変化(非介入群)

質問項目	男子			女子		
	事前 n=1358	事後 n=1350	差	事前 n=1211	事後 n=1193	差
1 クラミジアは性病	26.1	40.5	14.4	32.6	43.9	11.3
2 HIVとSTI相互作用	20.5	31.4	10.9	21.1	34.5	13.4
3 STIは無症状のことがある	19.4	25.5	6.1	20.4	27.7	7.3
4 STIは不妊の原因になりうる	28.6	39.0	10.4	36.2	46.3	10.1
5 地域中絶増加	21.1	30.0	8.9	25.2	37.3	12.1
	115.7	166.4	50.7	135.5	189.7	54.2
平均	23.1	33.3	10.1	27.1	37.9	10.8

表8 HIV/STI 関連知識(重点5項目)の変化(:不完全介入群:男女4校)

質問項目	男子			女子		
	事前 n=207	事後 n=195	差	事前 n=193	事後 n=181	差
1 クラミジアは性病	11.6	50.3	38.7	16.6	54.7	38.1
2 HIVとSTI相互作用	16.4	42.6	26.2	18.7	47.5	28.8
3 STIは無症状のことがある	5.8	25.1	19.3	14.5	34.3	19.8
4 STIは不妊の原因になりうる	16.4	48.2	31.8	24.4	58.0	33.6
5 地域中絶増加	9.7	39.5	29.8	23.3	51.4	28.1
	59.9	205.7	145.8	97.5	245.9	148.4
平均	12.0	41.1	29.2	19.5	49.2	29.7

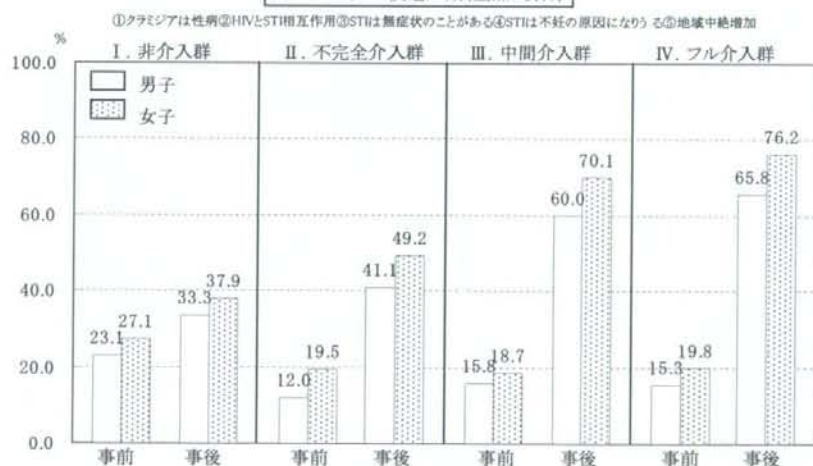
表9 HIV/STI 関連知識（重点5項目）の変化（中間介入群：男女42校）

質問項目	男子			女子		
	事前 n=2545	事後 n=2506	差	事前 n=2481	事後 n=2473	差
1 クラミジアは性病	18.6	76.5	57.9	21.0	83.8	62.8
2 HIV と STI 相互作用	16.1	61.1	45.0	17.0	69.0	52.0
3 STI は無症状のことがある	13.0	41.3	28.3	12.6	52.3	39.7
4 STI は不妊の原因になるうる	16.3	62.1	45.8	19.9	73.9	54.0
5 地域中絶増加	15.0	59.1	44.1	23.1	71.6	48.5
	79.0	300.1	221.1	93.6	350.6	257.0
平均	15.8	60.0	44.2	18.7	70.1	51.4

表10 HIV/STI 関連知識（重点5項目）の変化（フル介入群：男女51校）

質問項目	男子			女子		
	事前 n=3188	事後 n=3121	差	事前 n=3059	事後 n=3022	差
1 クラミジアは性病	17.8	79.2	61.4	20.6	87.3	66.7
2 HIV と STI 相互作用	15.0	68.8	53.8	18.2	76.4	58.2
3 STI は無症状のことがある	12.7	47.4	34.7	12.7	59.6	46.9
4 STI は不妊の原因になるうる	17.3	71.9	54.6	24.1	81.9	57.8
5 地域中絶増加	13.9	61.6	47.7	23.6	75.9	52.3
	76.7	328.9	252.2	99.2	381.1	281.9
平均	15.3	65.8	50.4	19.8	76.2	56.4

図17. HIV/STI関連知識（重点5項目）



◆高校2年生（表11）（表12）（表13）（表14）

本予防プログラムに参加した高校2年生におけるエイズ/性感染症に関する知識項目の正解率を介入の前後で比較した。

知識項目のうち、若者のリスク認知に特に関わりの深い、「①クラミジアはSTI、②HIVとSTIの相互作用、③STIは無症状のことがある、④STIは不妊の原因になりうる、⑤地元の中絶が多い」の5項目を重点知識項目として抽出し、介入前後の重点知識項目の変化を比較した。それによると、授業を行っていない非介入群Iにおける正解率平均値の上昇は、男女とも10%前後（男子10.4%、女子6.8%）、不完全介入群IIにおける正解率の上昇も男女とも10%前後（男子11.6%、女子8.9%）にとどまったが（表11）（表12）、IVフルモデル群（男子28.7%、女子31.6%）では30%前後（表14）、III中間介入群（男子32.0%、女子35.4%）（表13）もフルモデル群と同等の効果が得られ、モデル授業実施学校群では正解率が30%と、知識が大幅に増加することが再確認された。但し、中学生同様、重点知識項目の中ですべての項目が、同じように上昇しているのではなく、「STIは無症状の場合がある」の正解率の上昇は他の項目に比べて教育効果が小さかった。昨年度も同様の傾向が観察されたため、今年度はこれらの項目に関してはビデオを見せるだけでなく教師からの図や言葉による強調した説明も加えて指導を強化したが、知識の大幅上昇は見られず、また中学生に見られた昨年度からの知識上昇率の改善も見られず、知識がエスケープしている可能性があることから、この項目に関しては、生徒へのインタビューも行い、原因を究明し、中学生とは異なる追加のアプローチの必要性が示唆された。

男女で、I群（非介入群：2004年度）の値を、II群、III群、IV群（介入群）の値の分布と1標本t検定で比較すると、重点5項目すべてにおいて統計的に有意であった（男女とも： $P < 0.001$ ）。

表11 HIV/STI関連知識（重点5項目）の変化（非介入：G0群）

質問項目	男子			女子		
	事前 n=391	事後 n=380	差	事前 n=623	事後 n=604	差
1 クラミジアは性病	56.5	63.7	7.2	65.3	70.0	4.7
2 HIVとSTI相互作用	34.5	49.2	14.7	43.7	52.6	8.9
3 STIは無症状のことがある	45.3	51.6	6.3	56.5	60.1	3.6
4 STIは不妊の原因になるうる	45.8	55.8	10.0	57.9	62.4	4.5
5 地域中絶増加	40.2	53.9	13.7	48.0	60.1	12.1
	222.3	274.2	51.9	271.4	305.2	33.8
平均	44.5	54.8	10.4	54.3	61.0	6.8

表12 HIV/STI関連知識（重点5項目）の変化（不完全介入群：男女とも2校）

質問項目	男子			女子		
	事前 n=197	事後 n=186	差	事前 n=113	事後 n=110	差
1 クラミジアは性病	64.0	68.3	4.3	62.8	65.5	2.7
2 HIVとSTI相互作用	29.9	50.0	20.1	27.4	43.6	16.2
3 STIは無症状のことがある	22.8	28.5	5.7	31.0	33.6	2.6
4 STIは不妊の原因になるうる	31.5	43.5	12.0	30.1	41.8	11.7
5 地域中絶増加	32.5	48.4	15.9	48.7	60.0	11.3
	180.7	238.7	58.0	200.0	244.5	44.5
平均	36.1	47.7	11.6	40.0	48.9	8.9

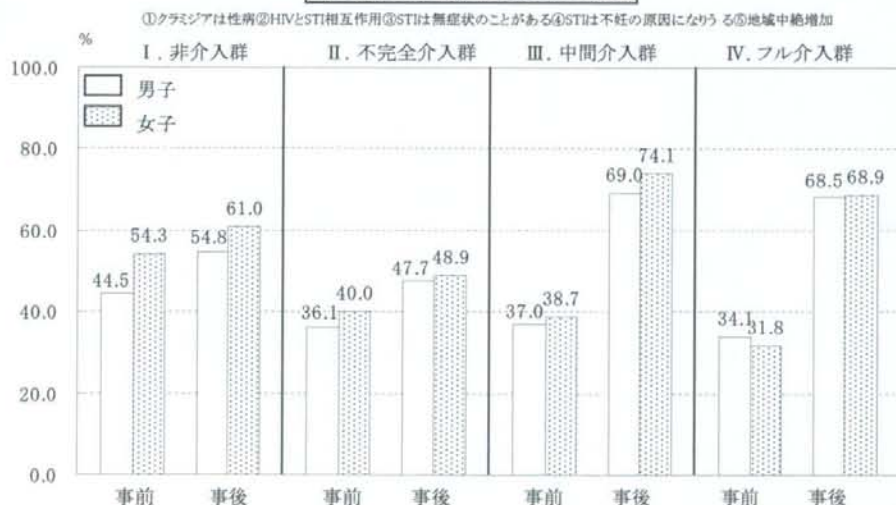
表 13 HIV/STI 関連知識（重点 5 項目）の変化（中間介入群：男女とも 20 校）

質問項目	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=1424	n=1364		n=1930	n=1882	
1 クラミジアは性病	59.3	84.5	25.2	59.5	88.5	29.0
2 HIV と STI 相互作用	28.8	72.3	43.5	28.3	75.2	46.9
3 STI は無症状のことがある	23.0	43.5	20.5	22.3	48.6	26.3
4 STI は不妊の原因になるうる	29.6	70.6	41.0	31.9	75.3	43.4
5 地域中絶増加	44.1	74.0	29.9	51.6	83.0	31.4
	184.8	344.9	160.1	193.6	370.6	177.0
平均	37.0	69.0	32.0	38.7	74.1	35.4

表 14 HIV/STI 関連知識（重点 5 項目）の変化（フル介入群：男子 30 校、女子 32 校）

質問項目	男子			女子		
	事前	事後	差	事前	事後	差
	n=2872	n=2784		n=3592	n=3489	
1 クラミジアは性病	66.7	85.1	18.4	67.5	87.7	20.2
2 HIV と STI 相互作用	31.6	71.9	40.3	31.0	75.3	44.3
3 STI は無症状のことがある	26.1	47.1	21.0	27.8	52.7	24.9
4 STI は不妊の原因になるうる	36.1	70.1	34.0	39.3	76.1	36.8
5 地域中絶増加	47.0	77.0	30.0	51.9	83.9	32.0
			143.7			158.2
平均	34.1	68.5	28.7	31.8	68.9	31.6

図 18. HIV/STI 関連知識（重点 5 項目）



(2) 性意識の変化

◆ 中学3年生

■ 性関係に対する態度の変化

1. 中学生が性関係を持つことに対する考え方(表15)

全ての中学3年生に、「中学生が性関係を持つことをどう思いますか」と尋ねた(注:但しI群[2004年度]は「友達が」という表現を用いているので質問のワーディングが異なる)。「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の5段階で中学生の性関係の容認の程度を調べた(表15)(注:性経験の意味を知っている生徒の中での割合を示す)。

表15に、介入による生徒の意識(中学生の性関係を容認する意識)の変化を示した。図19に容認者割合として「かまわない」と「どちらかと言えばかまわない」の合計として提示した。それによると、非介入(I)群では、容認者割合が男子で4%上昇し、女子でも2%上昇し、非介入群では男女とも、性意識がやや活発化している傾向が示された。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)群では、容認者割合が男子で7%、女子で9%と、男女とも10%近く容認者割合の顕著な減少が観察された。さらに、中間介入(III)群でも、容認者割合は男子4%、女子6%減少し、不完全介入(II)群でも、容認者割合は男子14%、女子12%減少し(注:II群はサンプル数が少数のため、結果の解釈には注意を要する)フル介入群と同様の性関係を容認する意識の抑制が観察された。以上を、まとめると、本プロジェクトのWYSH教育により中学生が性関係を持つことに対する意識が抑制されていることが示された。中学生に対する教育効果の特徴としては、男子に比べ女子の方がやや効果が高い傾向が見られた。

男女で、I群(非介入群:2004年度)の「容認者割合」の値を、II群、III群、IV群(介入群)の値の分布と1標本t検定と比較すると、男女とも統計学的に有意差があった(男女とも: $P<0.001$)。

表15. 中学生の性関係容認意識

				どちらかと かまわない	どちらかと いえばかま わらない	どちらかと いえばよく ない	よくない	わからない	容認者割合
I 非介入群 (2004年度)	男子 22校	事前	1176	40.6	18.2	16.4	14.2	10.5	58.8
		事後	1138	43.8	19.2	14.6	12.8	9.5	63.0
		差		3.2	1.0	-1.8	-1.4	-1.0	4.2
	女子 22校	事前	1092	31.7	18.4	24.9	15.8	9.2	50.1
		事後	1043	32.3	19.5	24.7	14.8	8.7	51.8
		差		0.6	1.1	-0.2	-1.0	-0.5	1.7
II 不完全介入群	男子 4校	事前	134	28.4	19.4	20.1	18.7	12.7	47.8
		事後	157	22.9	10.8	26.1	25.5	10.2	33.7
		差		-5.5	-8.6	6.0	6.8	-2.5	-14.1
	女子 4校	事前	145	20.0	20.0	29.7	21.4	4.8	40.0
		事後	157	12.7	15.3	31.2	35.0	4.5	28.0
		差		-7.3	-4.7	1.5	13.6	-0.3	-12.0
III 中間介入群	男子 42校	事前	1630	24.8	18.3	23.2	21.2	9.4	43.1
		事後	1982	23.7	15.7	23.4	26.1	9.0	39.4
		差		-1.1	-2.6	0.2	4.9	-0.4	-3.7
	女子 42校	事前	1897	16.0	16.3	29.1	29.2	6.8	32.3
		事後	2198	13.6	12.6	28.3	36.9	6.5	26.2
		差		-2.4	-3.7	-0.8	7.7	-0.3	-6.1
IV フル介入群 2008年	男子 51校	事前	2036	25.9	17.6	20.6	22.0	11.3	43.5
		事後	2585	21.4	14.7	23.4	29.2	8.9	36.1
		差		-4.5	-2.9	2.8	7.2	-2.4	-7.4
	女子 51校	事前	2385	16.6	17.4	29.1	26.6	8.5	34.0
		事後	2796	12.0	13.3	29.8	37.4	5.3	25.3
		差		-4.6	-4.1	0.7	10.8	-3.2	-8.7

2. 高校生になってから性関係を持つことに対する考え方(表 16)

全ての中学3年生に、「高校生になったとき、性関係を持つことをどう思うか」を尋ねた(注:但しI群[2004年度]は「友達が」という表現を用いているので質問のワーディングが異なる)。「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の5段階で高校生になってから性関係の容認の程度を調べた(表16)(注:性経験の意味を知っている生徒の中での割合を示す)。

表16に、介入による生徒の意識(高校生になってからの性関係を容認する意識)の変化を示した。図20に容認者割合として「かまわない」と「どちらかと言えばかまわない」の合計として提示した。それによると、非介入(I)群では、容認者割合が男子1%、女子2%とわずかに減少し、非介入群では男女とも、高校生になってからの性関係容認にほとんど変化がない傾向が示された。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)群では、容認者割合が男子で9%、女子で12%と、男女とも10%前後容認者割合の顕著な減少が観察された。さらに、中間介入(III)群でも、容認者割合は男子4%、女子12%減少し、不完全介入(II)群でも、容認者割合は男子15%、女子13%減少し(注:II群はサンプル数が少数のため、結果の解釈には注意を要する)、フル介入群と同様高校生になってからの性関係を容認する意識の抑制が観察された。以上を、まとめると、本プロジェクトのWYSH教育により高校生になってから性関係を持つことに対する意識が抑制されていることが示された。教育効果の特徴としては、前述の中学生の性関係容認と同様、男子に比べ女子の方がやや効果が高い傾向が示された。

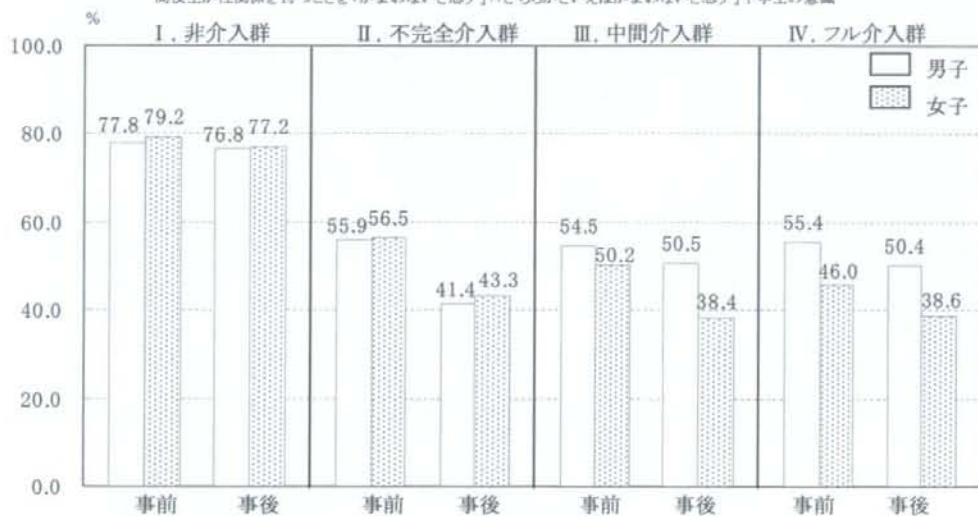
男女で、I群(非介入群:2004年度)の「容認者割合」「否認者割合」の値を、II群、III群、IV群(介入群)の値の分布と1標本t検定で比較すると、男女とも統計学的有意差が認められた(男女とも: $P<0.001$)。

表 16. 高校生の性関係容認意識

				どちらかとい	どちらかとい	よくない	わからない	容認者割合	
				かまわない	えばかま	よくない	わからない		
				わかない	わかない	ない			
I 非介入群 (2004年度)	男子 22校	事前	1171	59.0	18.8	7.7	4.6	9.9	77.8
		事後	1139	57.4	19.4	8.3	4.1	10.8	76.8
		差		-1.6	0.6	0.6	-0.5	0.9	-1.0
	女子 22校	事前	1091	55.7	23.5	9.3	3.6	7.9	79.2
		事後	1055	53.8	23.4	10.6	3.4	8.7	77.2
		差		-1.9	-0.1	1.3	-0.2	0.8	-2.0
II 不完全介入群	男子 4校	事前	134	32.8	23.1	11.2	6.0	24.6	55.9
		事後	157	21.0	20.4	18.5	15.9	19.7	41.4
		差		-11.8	-2.7	7.3	9.9	-4.9	-14.5
	女子 4校	事前	145	30.3	26.2	12.4	10.3	16.6	56.5
		事後	157	17.8	25.5	19.1	19.1	17.2	43.3
		差		-12.5	-0.7	6.7	8.8	0.6	-13.2
III 中間介入群	男子 42校	事前	1630	31.9	22.6	14.0	11.1	17.2	54.5
		事後	1982	29.6	20.9	17.4	15.6	14.2	50.5
		差		-2.3	-1.7	3.4	4.5	-3.0	-4.0
	女子 42校	事前	1897	23.6	26.6	17.2	12.7	17.1	50.2
		事後	2198	17.8	20.6	21.5	21.3	16.7	38.4
		差		-5.8	-6.0	4.3	8.6	-0.4	-11.8
IVフル介入群 2008年	男子 51校	事前	2036	32.5	22.9	13.1	11.7	17.0	55.4
		事後	2585	26.3	19.7	17.6	18.3	15.7	46.0
		差		-6.2	-3.2	4.5	6.6	-1.3	-9.4
	女子 51校	事前	2385	24.4	26.0	17.0	12.7	17.8	50.4
		事後	2796	16.7	21.9	23.7	20.9	14.3	38.6
		差		-7.7	-4.1	6.7	8.2	-3.5	-11.8

図19.性意識(高校生)

高校生が性関係を持つことを「かまわないと思う」+「どちらかといえばかまわないと思う」中学生の意識



◆高校2年生

■性関係に対する態度の変化

1. 高校生が性関係を持つことに対する考え方(一般論)(表 17)

全ての高校2年生に、「一般に高校2年生が性関係を持つことをどう思いますか」と尋ねた(注:但しI群〔2004年度〕は「高校2年生が性関係を持つことをどう思いますか」という表現を用いているので厳密には質問のワーディングが異なる)。「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の5段階で高校生の性関係の容認の程度を調べた(表 17)

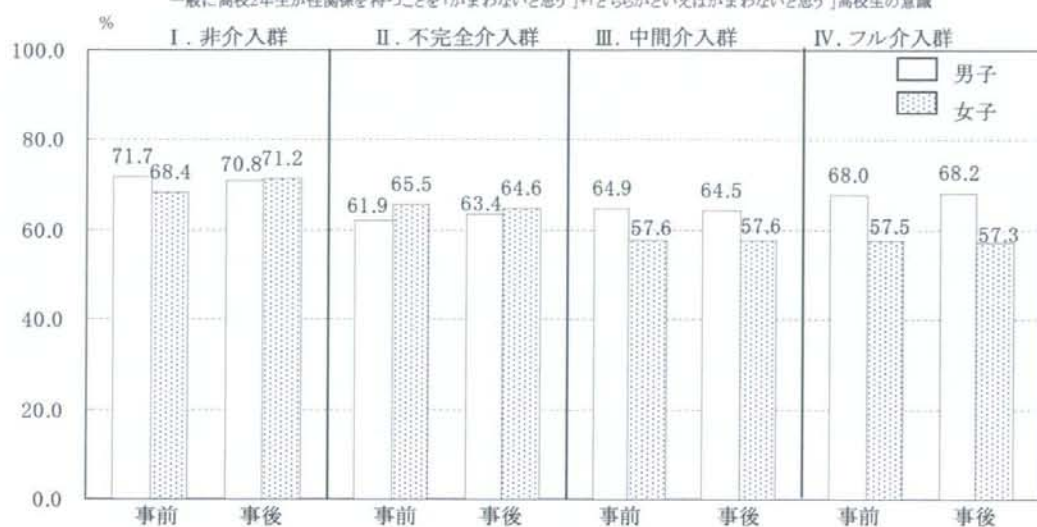
表 17 に、介入による生徒の意識(高校2年生の性関係を容認する意識)の変化を示した。図 21 に容認者割合として「かまわない」と「どちらかと言えばかまわない」の合計として提示した。それによると、非介入(I)群では、容認者割合が男子で1%減少し、女子では3%上昇していた。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)群では、容認者割合が男子で0.2%上昇、女子で0.2%減少と、男女とも容認者割合に変化は見られなかった。さらに、中間介入(III)群では、容認者割合は男子0.4%減少、女子変化なし、非介入(II)群では、容認者割合は男子2%上昇、女子1%減少とフル介入群同様、性関係容認意識の変化は観察されなかった。以上を、まとめると、本プロジェクトのWYSH 予防教育により高校生が性関係を持つことに対する高校生の容認意識に対しては全体としての影響は観察されなかった。

表 17. 高校生の性関係容認意識: 一般に高校2年生が性関係を持つことをどう思うか

		かまわない	どちらかといえ ばかまわない	どちらかとい えばよく ない	よくない	わから ない	容認者割合		
I 非介入群:	男子 6校	事前	391	53.5	18.2	10.2	7.7	10.0	71.7
		事後	380	54.2	16.6	9.5	6.8	11.8	70.8
		差		0.7	-1.6	-0.7	-0.9	1.8	-0.9
	女子 6校	事前	623	48.2	20.2	15.6	5.0	10.0	68.4
		事後	604	49.7	21.5	13.4	4.1	10.3	71.2
		差		1.5	1.3	-2.2	-0.9	0.3	2.8
II 不完全介入群:	男子 2校	事前	197	42.6	19.3	16.2	11.2	9.6	61.9
		事後	186	47.3	16.1	18.3	5.9	10.2	63.4
		差		4.7	-3.2	2.1	-5.3	0.6	1.5
	女子 2校	事前	113	42.5	23.0	15.9	3.5	13.3	65.5
		事後	110	39.1	25.5	15.5	5.5	8.2	64.6
		差		-3.4	2.5	-0.4	2.0	-5.1	-0.9
III 中間介入群:	男子 20校	事前	1424	43.2	21.7	12.9	7.2	12.8	64.9
		事後	1364	43.8	20.7	14.5	8.6	10.7	64.5
		差		0.6	-1.0	1.6	1.4	-2.1	-0.4
	女子 20校	事前	1930	31.7	25.9	19.3	8.9	11.2	57.6
		事後	1882	31.8	25.8	20.4	10.5	9.1	57.6
		差		0.1	-0.1	1.1	1.6	-2.1	0.0
IV フル介入群: 2008年	男子 30校	事前	2872	46.7	21.3	13.5	6.7	10.0	68.0
		事後	2784	47.1	21.1	12.9	7.7	9.7	68.2
		差		0.4	-0.2	-0.6	1.0	-0.3	0.2
	女子 32校	事前	3592	30.9	26.6	21.1	9.9	8.9	57.5
		事後	3489	31.8	25.5	20.3	11.8	7.4	57.3
		差		0.9	-1.1	-0.8	1.9	-1.5	-0.2

図20.性意識(一般)

一般に高校2年生が性関係を持つことを「かまわないと思う」+「どちらかといえばかまわないと思う」高校生の意識



2. 高校生が性関係を持つことに対する考え方(自分のこととして)(表 18)

全ての高校2年生に、「交際していると仮定して、高校2年生で自分が性関係を持つことをどう思いますか」と尋ねた(注:但しI群[2004年度]には、自分のこととしての性意識の質問を行っていないためこの項目に限り比較群なしで介入の前後比較のみとした)。「かまわないと思う」、「どちらかと言えばかまわないと思う」、「どちらかと言えばよくないと思う」、「よくないと思う」「わからない」の5段階で高校生の性関係の容認の程度を調べた(表 18)

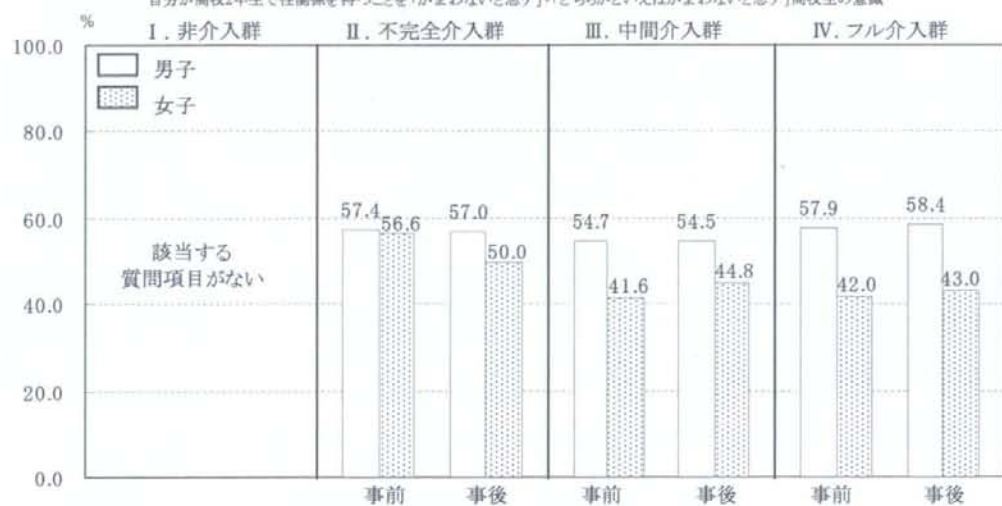
表 18 に、介入による生徒の意識(高校2年生で自分が性関係を持つことを容認する意識)の変化を示した。右端に容認者割合として「かまわない」と「どちらかと言えばかまわない」の合計として提示した。まず、非介入(Ⅱ)群では、容認者割合の変化は男子0.4%、女子7%減少が見られた(注:Ⅱ群はサンプル数が少数のため、結果の解釈には注意を要する)。中間介入(Ⅲ)群では、容認者割合は男子0.2%減少、女子3%上昇し、フル介入(Ⅳ)群では、容認者割合が男子で0.5%、女子で1%上昇と、男女とも容認者割合に変化は認められなかった。以上を、まとめると、本プロジェクトのWYSH 予防教育により高校生が自分自身が性関係を持つことに対する高校生の容認意識への影響は全体として見られないことが示された。

表 18. 高校生の性関係容認意識:自分が高校2年生で性関係を持つことをどう思うか

				かまわない	どちらか いえばかま わない	どちらか といえば いやだ	いやだ	わからない	容認者割合
I 非介入群: 該当する質問項目 がない	男子 6校	事前 391							
		事後 380							
		差							
女子 6校	事前 623								
	事後 604								
		差							
Ⅱ 不完全介入群:	男子 2校	事前 197	38.1	19.3	15.2	16.8	10.7		57.4
		事後 186	41.9	15.1	14.5	15.6	11.8		57.0
		差	3.8	-4.2	-0.7	-1.2	1.1		-0.4
女子 2校	事前 113	28.3	28.3	10.6	15.0	15.0		56.6	
	事後 110	34.5	15.5	13.6	15.5	14.5		50.0	
		差	6.2	-12.8	3.0	0.5	-0.5		-6.6
Ⅲ 中間介入群:	男子 20校	事前 1424	34.3	20.4	12.9	13.0	17.7		54.7
		事後 1364	34.5	20.0	14.0	16.1	13.9		54.5
		差	0.2	-0.4	1.1	3.1	-3.8		-0.2
女子 20校	事前 1930	23.1	18.5	18.1	19.4	18.3		41.6	
	事後 1882	23.8	21.0	17.4	22.4	13.5		44.8	
		差	0.7	2.5	-0.7	3.0	-4.8		3.2
Ⅳ フル介入群: 2008年	男子 30校	事前 2872	37.6	20.3	13.6	12.6	14.7		57.9
		事後 2784	39.6	18.8	13.6	13.6	13.1		58.4
		差	2.0	-1.5	0.0	1.0	-1.6		0.5
女子 32校	事前 3592	22.4	19.6	18.2	24.2	13.4		42.0	
	事後 3489	23.9	19.1	18.3	24.5	11.5		43.0	
		差	1.5	-0.5	0.1	0.3	-1.9		1.0

図21.性意識(自分が)

自分が高校2年生で性関係を持つことを「かまわないと思う」+「どちらかといえばかまわないと思う」高校生の意識



WYSH 教育の「高校生の性関係容認意識」に対する効果についての考察

本年度 WYSH 教育に参加した高校は全国で 53 校であった。

その中で性関係に対する容認度「一般に高校 2 年生が性関係を持つことをどう思うか」「高校 2 年生で自分が性関係を持つことをどう思うか」について「かまわないと思う」「どちらかと言えばかまわないと思う」の回答割合を足したものを WYSH 教育前と後で比較し WYSH 教育の効果を検討した。その結果、全体では「一般に高校 2 年生が性関係を持つことをどう思うか」が数%の減少、「高校 2 年生で自分が性関係を持つことをどう思うか」ではわずかながらの増加という結果に終わり、中学生のような顕著な性関係容認意識の抑制効果は観察されなかった。

その背景を調べるために、参加した 53 校のうち事後アンケートを実施できた学校および生徒数が男女計 80 人を上回る学校（男子 39 校、女子 42 校）を対象に学校別の評価を行った（性に関する意識は男女に差が見られるため、分析は男女別に行った）。その結果、高校生の性関係の容認度が 5%以上減少し教育効果が示された学校は、「一般に高校 2 年生が性関係を持つことをどう思うか」では、男子 12 校（30.8%）、女子 7 校（16.7%）、「高校 2 年生で自分が性関係を持つことをどう思うか」では、男子 6 校（15.4%）、女子 5 校（11.9%）存在し、同じ WYSH 教育を実施していても学校により効果が異なっており、教育効果が見られないわけではない可能性が示唆された。

【量的分析結果】

■ **教育効果の男女差**：男子と女子を比較すると、高校生に対する WYSH 教育の性関係容認意識に対する影響は女子よりも男子のほうに効果が大きいことが昨年引き続き示唆された（図 A、図 B）。

WYSH 授業実施において、高校生の性意識に影響を与える要因を探索するため、生徒の性関係容認度が 5%以上減少した学校を効果あり群（男子 12 校、女子 10 校）とし、それ以外の学校を効果なし群として、「平成 20 年度 WYSH 教育実施状況に関するアンケート」に基づき詳細な検討を行った。

効果あり群が 10~12 校と少ない状況での量的分析であったため、統計的有意差を認める項目は見られなかったが、両群で目立った差が認められた項目を以下に記す。

■ **男子の性意識に影響した可能性のある授業要因**

・**保健体育教諭の関わり**：男子の効果あり群では授業担当者に「保健体育教諭」が 54.5%関わっており、なし群の 38.5%よりも保健体育教諭が関わった割合が高かった。男子生徒にとって、同性であることの多い保健体育教諭による授業が好ましい結果につながったものと考えられる。

・**学級担任の関わり**：効果あり群では 36.4%、なし群で 61.5%の学校で授業担当者に「学級担任」が関わっていた。

■ **女子の性意識に影響した可能性のある授業要因**

・**学級担任の関わり**：効果あり群では 20.0%、なし群で 60.0%の学校で授業担当者に「学級担任」が関わっていた。この差は $p=0.065$ と統計的有意差に近かった。

上記「学級担任の関わり」の結果は、昨年と逆の結果を示している。高校の場合、研修会に参加するのは担任以外（養護教諭等）の可能性が高いため、研修会参加者から担任教諭への内容伝達の標準化が今後の課題であることが示唆された。

■ **教育前の容認度**

上記効果あり群校の事前調査における性関係容認割合は、「男子・一般」で 62.5~84.5%（最小値 51.7、最大値 84.5、中央値 69.2）、「男子・自分」48.7~74.6%（最小値 39.2、最大値 80.0、中央値 54.6）、「女子・一般」56.7~79.7%（最小値 33.9、最大値 86.7、中央値 59.7）、「女子・自分」41.9~83.3%（最小値 18.9、最大値 83.3、中央値 44.5）であり、もともと容認割合が高かった学校に効果がみら

れる傾向にあった（図 C、図 D）。

したがって WYSH 教育実施にあたっては、事前調査における生徒の性関係容認度を十分に把握した上で、比較的容認度が低い学校では生徒を刺激するような内容にならないよう特に配慮する必要があると考えられる。

【質的分析結果】

一方、生徒の性関係容認度が 10%以上増加する結果を示した学校が「一般に高校 2 年生が性関係を持つことをどう思うか」では男子 3 校、女子 1 校、「高校 2 年生で自分が性関係を持つことをどう思うか」では男子 4 校、女子 4 校存在した。前述の効果あり群と、これらの「逆効果群」とを質的に比較検討した結果、両者の間にはグループワークの活発さと授業実施教諭の感想に違いが見られた。

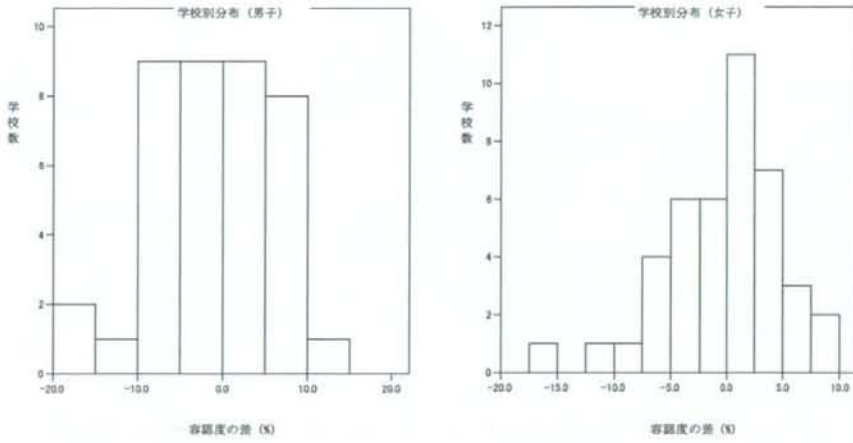
■ **グループワークの活発さの度合い**：逆効果群では、グループワークに「一般に高校 2 年生が性経験をもつことをどう思うか」「性についての友人の考えを聞く」など、いわゆる性意識に直接関わるようなテーマがあげられており、話し合いが「非常に活発だった」ところが多かった。効果あり群でも「高校生が性関係をもつことをどう思うか？」との性意識に直結するようなテーマが選ばれていたが話し合いが「あまり活発ではなかった」という。

比較対象となった学校数が少ないため、想像の域を超えないが「非常に活発」なグループワークでの友人の言動が、性意識を容認する方向を向いていた場合、参加者がその影響を受けてしまうことは十分に考えられる。性意識の活発な生徒が存在する学校では、グループ分けを慎重に行う必要があり、高校生の性行動を容認する意見が発表されたときの授業担当教諭のフォローも重要であると考えられた。

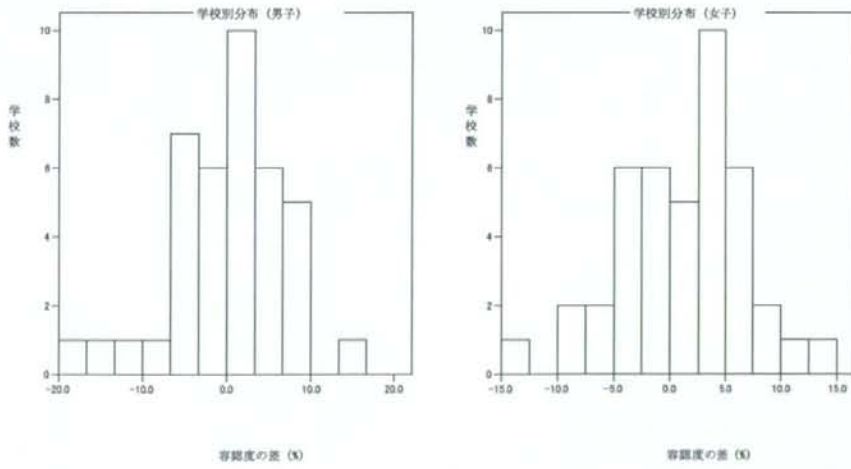
■ **授業実施教諭の感想**：効果あり群の学校では「生徒の生の声が聞いて、目の前の生徒がどう考え、何を悩んでいるのかを知れた」「ひとり悩んでいた生徒が相談に来るきっかけとなった」「十分に生徒たちの興味関心を集めることができたのではないかなと思われる」「教師という一面だけではなく、女性として、母として生きてきた姿を見せたことは、生徒にとって新鮮だったようだ」といった、教師と生徒の関係性の向上が示唆される感想が男女共通して見られた。また「一つのことをチームで創り上げていくことができたという大きな達成感を感じることもできた」「本校の教員が持ってきてくれた写真などをもとに、メッセージビデオを作成した」「実施する教員のスキルに関係なく、一定レベルの効果を得られる」など、学校全体、チームでの取り組みの様子が示されていた。一方、逆効果群では感想の記載が少なく、各教諭のアンケート記載内容にずれがある等、全体としてまとまりのない印象を受けた。さらに『寝た子を起こすな』といった考えもある『先生自身が『はずかしい』という思いが強い』『生徒の実態がいまいわからない』など、実施者自身が不安を抱きつつ授業に臨んだことが示唆されていた。

以上をまとめると、高校生への WYSH 教育の性関係容認意識への教育効果は男女で差があり、性差に配慮した性教育実施が重要であること、事前調査における生徒の性関係容認度の如何により授業内容に配慮する必要があること、グループワークではグループ分けと発表後のフォローが重要であること、WYSH 教育に携わる教諭の生徒への思いを大切にするとともに不安・疑問点は可能な限り実施前に解消することが重要であると考えられる。

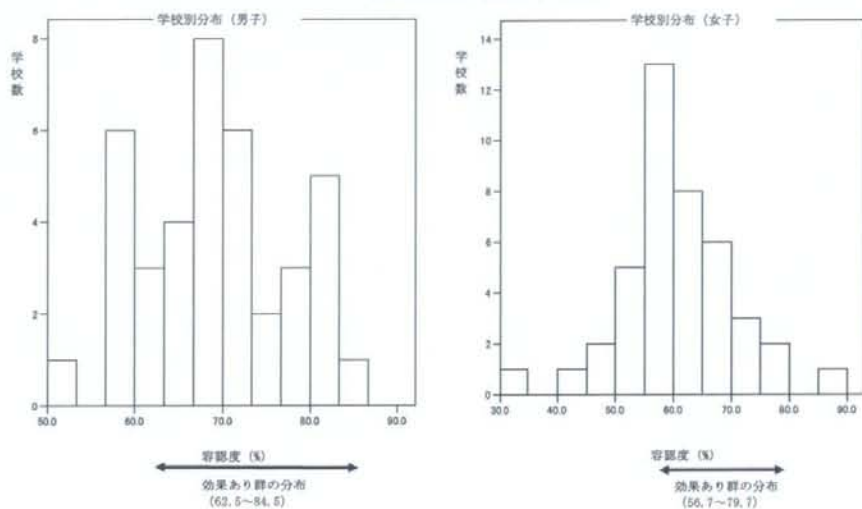
図A. 教育前後の容認度の差（一般論）



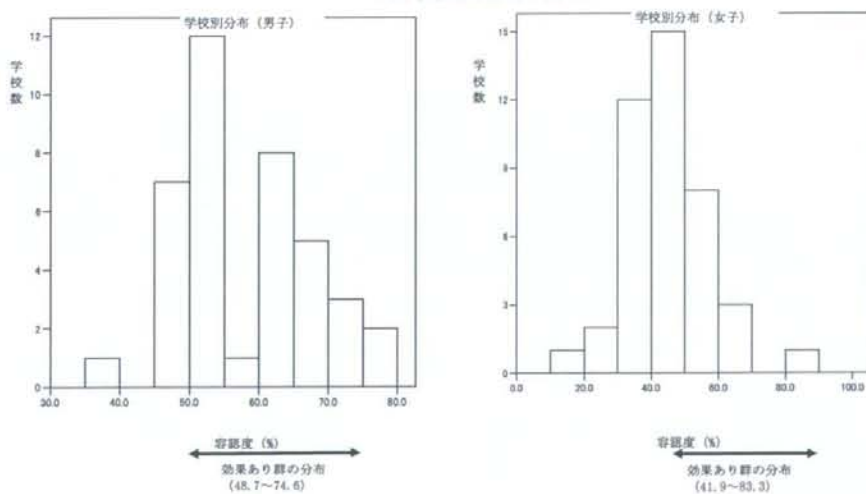
図B. 教育前後の容認度の差（本人）



図C. 教育前の容認度（一般論）



図D. 教育前の容認度（本人）



(3) リスク認知の変化

◆ 中学 3 年生

1. 将来の性感染症感染リスク認知(表 19)

性経験の有無に関わらず全ての中学 3 年生に、「将来、交際中に自分が性感染症に感染する可能性があると思うか?」を尋ねた。「まったくないと思う」、「あまりないと思う」、「ありそうだと思う」、「かなりあると思う」、「わからない」の 5 段階で、介入前後の自分自身の将来の STI 感染に対するリスク認知の変化を調べた。「ありそうだと思う」+「かなりあると思う」と答えた人を『リスク認知群』として合計割合(%)を、介入前後で、性別・介入群別に示した(表 19)。

まず、非介入群(I)では、『リスク認知群』の増加は男子 3%、女子 4%にとどまった。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)では、男子 23%、女子 27%と顕著な増加が観察された。一方、中間介入群(III)でも、男子 20%、女子 25%の増加、不完全介入群(II)でも、男子 18%、女子 24%で、男女ともに 20%前後の大幅なリスク認知の増加が観察された。

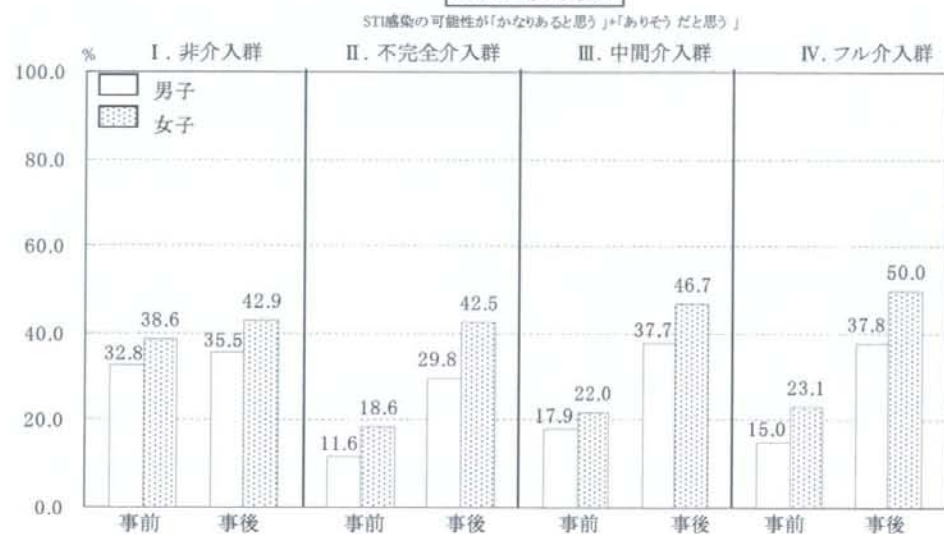
以上を、まとめると、本プロジェクトの予防教育により、将来の自分自身の STI 感染に対するリスク認知が大幅に上昇することが示された。

男女で、I 群(非介入群:2004 年度)の『リスク認知群』の値を、II 群、III 群、IV 群(介入群)の値の分布と t 検定で比較すると、男女とも統計的に有意であった(男女とも: $P < 0.001$)。

表 19. STI リスク認知: 将来、自分が STI に感染する可能性

				かなりある	ありそうだ	あまりない	全くない	わからない	リスク認知
I 非介入群 (2004 年度)	男子 22校	事前	1182	2.9	29.9	24.0	11.7	29.4	32.8
		事後	1178	4.9	30.6	22.8	9.7	27.2	35.5
		差		2.0	0.7	-1.2	-2.0	-2.2	2.7
	女子 22校	事前	1095	2.9	35.7	21.8	4.7	33.2	38.6
		事後	1089	4.4	38.5	19.8	4.7	26.1	42.9
		差		1.5	2.8	-2.0	0.0	-7.1	4.3
II 不完全介入群	男子 4校	事前	207	1.0	10.6	17.4	17.4	50.2	11.6
		事後	195	2.1	27.7	22.6	8.7	36.4	29.8
		差		1.1	17.1	5.2	-8.7	-13.8	18.2
	女子 4校	事前	193	1.0	17.6	28.5	8.3	39.9	18.6
		事後	181	5.5	37.0	21.0	6.6	27.6	42.5
		差		4.5	19.4	-7.5	-1.7	-12.3	23.9
III 中間介入群	男子 42校	事前	2545	1.2	16.7	23.2	12.3	43.7	17.9
		事後	2506	5.0	32.7	22.9	9.0	27.6	37.7
		差		3.8	16.0	-0.3	-3.3	-16.1	19.8
	女子 42校	事前	2481	1.1	20.9	25.2	7.4	41.7	22.0
		事後	2473	5.6	41.1	20.9	3.9	24.7	46.7
		差		4.5	20.2	-4.3	-3.5	-17.0	24.7
IV フル介入群 2008 年	男子 51校	事前	3188	0.8	14.2	25.0	13.5	43.5	15.0
		事後	3121	4.3	33.5	23.2	8.5	27.3	37.8
		差		3.5	19.3	-1.8	-5.0	-16.2	22.8
	女子 51校	事前	3059	1.2	21.9	25.6	7.8	40.0	23.1
		事後	3022	6.7	43.3	21.8	3.5	21.3	50.0
		差		5.5	21.4	-3.8	-4.3	-18.7	26.9

図22.STIリスク認知



2. 将来の HIV 感染リスク認知(表 20)

性経験の有無に関わらず全ての中学3年生に、「将来、交際中に自分が HIV に感染する可能性があると思うか?」を尋ねた。「まったくないと思う」、「あまりないと思う」、「ありそうだと思う」、「かなりあると思う」、「わからない」の5段階で、介入前後の自分自身の将来の HIV 感染に対するリスク認知の変化を調べた。「ありそうだと思う」+「かなりあると思う」と答えた人を『リスク認知群』として合計割合(%)を、介入前後で、性別・介入群別に示した(表 20)。

まず、非介入群(I)では、『リスク認知群』の増加は男子4%、女子5%にとどまった。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)では、男子20%、女子26%の顕著な増加が観察された。一方、中間介入群(III)でも、男子17%、女子23%の増加、不完全介入群(II)でも、男子16%、女子21%増加で、男女ともに20%前後の大幅なリスク認知の増加が観察された。

以上をまとめると、本プロジェクトの予防教育により、STI 感染のリスク認知の向上と同じく、将来の自分自身の HIV 感染に対するリスク認知が大幅に上昇することが示された。

男女で、I群(非介入群:2004年度)の『リスク認知群』の値を、II群、III群、IV群(介入群)の値の分布と t 検定で比較すると、男女とも統計学的に有意であった(男女とも: $P<0.001$)。

表 20. HIV リスク認知: 将来、自分が HIV に感染する可能性

			かなりある	ありそうだ	あまりない	全くない	わからない	リスク認知	
I 非介入群 (2004年度)	男子 22校	事前	1182	1.4	22.8	26.7	15.5	32.1	24.2
		事後	1178	3.7	24.1	24.4	13.1	30.7	27.8
		差		2.3	1.3	-2.3	-2.4	-1.4	3.6
	女子 22校	事前	1095	2.1	27.3	25.7	7.0	36.8	29.4
		事後	1089	3.2	31.0	23.3	6.0	32.2	34.2
		差		1.1	3.7	-2.4	-1.0	-4.6	4.8
II 不完全介入群	男子 4校	事前	207	1.0	8.2	17.9	17.4	52.2	9.2
		事後	195	2.1	22.6	20.5	13.3	39.0	24.7
		差		1.1	14.4	2.6	-4.1	-13.2	15.5
	女子 4校	事前	193	1.0	11.4	26.4	11.4	45.1	12.4
		事後	181	0.6	32.6	23.8	8.8	32.0	33.2
		差		-0.4	21.2	-2.6	-2.6	-13.1	20.8
III 中間介入群	男子 42校	事前	2545	0.9	14.2	22.6	15.4	43.9	15.1
		事後	2506	3.8	28.2	23.4	11.1	30.8	32.0
		差		2.9	14.0	0.8	-4.3	-13.1	16.9
	女子 42校	事前	2481	0.8	15.9	25.9	8.9	44.7	16.7
		事後	2473	4.5	35.0	23.0	5.1	28.5	39.5
		差		3.7	19.1	-2.9	-3.8	-16.2	22.8
IV フル介入群 2008年	男子 51校	事前	3188	0.6	11.6	23.8	15.6	45.3	12.2
		事後	3121	2.9	29.6	23.9	10.4	30.0	32.5
		差		2.3	18.0	0.1	-5.2	-15.3	20.3
	女子 51校	事前	3059	0.9	17.0	25.6	8.8	44.1	17.9
		事後	3022	4.6	38.8	24.2	4.0	24.9	43.4
		差		3.7	21.8	-1.4	-4.8	-19.2	25.5

◆高校2年生

1. 将来の性感染症感染リスク認知(表 21)

高校2年生に、「将来、自分が性感染症に感染する可能性があると思うか?」を尋ねた。「まったくないと思う」、「あまりないと思う」、「ありそうだと思う」、「かなりあると思う」、「わからない」の5段階で、介入前後の自分自身の将来のSTI感染に対するリスク認知の変化を調べた。「ありそうだと思う」+「かなりあると思う」と答えた人を『リスク認知群』として合計割合(%)を、介入前後で、性別・介入群別に示した(表21)。

まず、非介入群(I)では、『リスク認知群』は男子0.4%の増加、女子4%減少で、非介入群(II)では『リスク認知群』は男子2%の減少、女子2%増加であり、リスク認知の変化は観察されなかった。それに対し、介入群での変化は、フル介入(IV)では、男子9%、女子12%と男女とも10%前後の顕著な増加が観察された。一方、中間介入群(III)でも、男子12%、女子13%の顕著なリスク認知の増加が観察された。

以上を、まとめると、本プロジェクトの予防教育により、中学生同様、将来の自分自身のSTI感染に対するリスク認知が大幅に上昇することが示された。

男女で、I群(非介入群:2004年度)の『リスク認知群』の値を、III群、IV群(介入群)の値の分布とt検定で比較すると、男女とも統計学的に有意であった(男女とも: $P<0.001$)。

表 21. 自分 STI にかかるとの可能性があると思うか?

			かなりある+ありそうだ		
			人数	(%)	
I 非介入群: (2004 年度)	男子 6 校	事前	391	131	33.5
		事後	380	129	33.9
		差		-2	0.4
	女子 6 校	事前	623	281	45.1
		事後	604	246	40.8
		差		-35	-4.3
II 非介入群:	男子 2 校	事前	197	58	29.4
		事後	186	51	27.4
		差			-2.0
	女子 2 校	事前	113	36	31.9
		事後	110	37	33.6
		差			1.7
III 中間介入群:	男子 20 校	事前	1424	345	24.2
		事後	1364	496	36.4
		差			12.1
	女子 20 校	事前	1930	441	22.8
		事後	1882	665	35.3
		差			12.5
IV フル介入群: 2008 年	男子 30 校	事前	2872	757	26.4
		事後	2784	973	34.9
		差			8.6
	女子 32 校	事前	3592	883	24.6
		事後	3489	1279	36.7
		差			12.1

図23.STIリスク認知

STI感染の可能性が「かなりあると思う」+「ありそう だと思う」

